創世ホール通信 No. 287

催し案内＋文化ジャーナル
2018年12月1日発行■北島町立図書館・創世ホール
電話：088-698-1100　ファクシミリ：088-698-1180
〒771-0207　徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91

故　竹内晃子遺作展

12月8日(土)・9日(日)
午前10時～午後4時

会場：2階　ギャラリースペース　入場無料
主催：藍たけのうち工房　竹内良子(☎080-2995-6663)
■ろうけつ染め、型染、草木染、藍染による着物、反物、羽織、タペストリーなど、徳島県無形文化財技術保持者・竹内晃子さんが遺した作品群を展示します。
※前号(No.285)に記載した開催情報から、終了時刻が変更されています。ご了承ください。

2018年度北島町青少年健全育成講演会
日本語教師としての国際協力活動
中央アジア・キルギス共和国での学び

12月14日(金)　午後1時30分～

講師：**西條結人**(四国大学助教授　北島町出身)
演題：「日本語教師としての国際協力活動～中央アジア・キルギス共和国での学び」
会場：3階　多目的ホール　入場無料
主催：北島町青少年健全育成町民会議
(☎088-698-9812)

■講師紹介■
2015年から2年間、青年海外協力隊員として、キルギス共和国のビシケク人文大学東洋国際関係学部日本語日本文学講座で日本語授業や大学院生への研究指導を担当。

創世ホール名画鑑賞会　29
神宮〒希林　わたしの神様

2019年1月19日(土)
2回上映　①午前10時30分～　②午後2時～

©東海テレビ放送

©東海テレビ放送

会場：3階　多目的ホール
入場料：大学生・一般　**前売1,000円**(当日1,300円)
小・中・高　**当日のみ1,000円**
シニア(60歳以上)**当日のみ1,000円**
上映作品：「神宮〒希林　わたしの神様」
(2014年、日本、96分)
旅人＝樹木希林　監督＝伏原健之　制作著作＝東海テレビ放送
主催：創世ホール名画鑑賞会実行委員会
(☎088-698-1100)

■2018年9月に、惜しまれつつも世を去られた樹木希林さん。本作は2013年に撮影された、希林さんの「はじめてのお伊勢参りドキュメント」です。■伊勢神宮の神域をめぐり、神宮林の山や志摩の石神さま、そして歌人の岡野弘彦さんのもとを訪ねます。■いのち、家族、そして愛…伊勢路でのさまざまな出会いをとおして、生きることを見つめなおす、そんな旅。皆さんもゆるりとごいっしょください。

北島迷店街TV　アーカイブ展

12月14日(金)～16日(日)
午前10時～午後6時　※最終日は午後5時

会場：2階　ギャラリースペース　入場無料
主催：北島町商工会(☎088-698-2275)
●裏話ギャラリートーク
12月16日(日)　①午前11時～　②午後3時～
■北島の名店(迷店!?)を渡り歩くドキュメンタリー番組「北島迷店街」(制作：キューテレビ/平成28・29年度放送)が3日間限りの大復活。あの店この店の知られざるディープな魅力を個性派コピーライター＆イラストレーターがお伝えします。■最終日には出演者による裏話ギャラリートークを開催。先着5名様に「即興あなたのコピー＆似顔絵」色紙プレゼント！

文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

故郷は地球
～脚本家・佐々木守がめざしたもの⑧

ＳＦ特撮研究家★池田憲章

講演採録●2007年２月25日●北島町立図書館・創世ホール

■「怪奇大作戦／京都買います」は、50分あったものを切り刻んでいった。そしたら、最後は岸田森ばっかりになっちゃったわけですけれども。そこで最後の、ある寺で、尼僧―尼さん―になって箒で庭を掃いている美也子さんに会って、岸田森演じる牧史郎はショックを受けます。最後は、美也子さんは仏像になってしまうわけです。

■ここのシーンに関しては、京都に着いて打ち合わせた時に、実相寺さんが「あ。ここは、仏像が欲しいな」と言い出した。仏像に変身させたい、つまり美也子さん自身が仏像になってしまうという終わり方がいいと。

■美術監督の池谷さんは、もうびっくりした(笑い)。台本にそんなこと書いてないですから。そして、あわてて美術大の学生アルバイトを雇って、３日間で美也子さん―斉藤チヤ子―に似せた仏像を作って、それを庭に置いて、あのシーンを撮影したんですね。

■ですから、仏像の部分は佐々木守さんのシナリオには、ない描写なんですね。岸田森が、美也子さんから「(私は) 仏像と暮らした方が幸せだと思います。忘れてください」と言われ、悲しく去っていくという台本を、実相寺さんは、美也子さんを仏像にしてしまおうと考えた。

■僕たちの純粋な心が、いかに現代社会では蝕〔むしば〕まれていくか、要するに純粋に生きたい人は忌避されるのが日本の社会なんだよ、みたいなことを、仏像になることで見せようとしたといえるのではないか。

■佐々木守さんは、この「京都買います」に関われて非常によかったとおっしゃっていました。橋本さんも、自分がテレビドラマを作ってきてた中で、もし１本作品を選ぶとすれば「京都買います」だろう、と。それぐらい、テレビドラマの持っている可能性を見せた作品なんだという思いがあるんですね。

■岸田さんも、実相寺さんと「京都買います」の物語によって、入魂の演技となった。美也子さんたちが捕まるかもしれない、まして、自分が発信機を見つけて捕まえるわけですから、悩みに悩んだ末に、朝、警察署に来ると目が真っ赤なんですね。それは、実はずーっとお酒を飲んでいたために、二日酔いで目が真っ赤になっていたわけですけど(笑い)、それはキャラクターの芝居に使える。ロケーションのシーンは、ノーメイクで行こう、だからライトもレフも使わない、と。本気で美也子さんを思っている彼の顔が、きれいなわけがない、人間・牧史郎で行くんだという部分で、岸田森さんも、ある種の勝負をかけた作品だったわけです。

■これなんかも、橋本洋二というプロデューサー、佐々木守のシナリオ、岸田森という役者、実相寺昭雄という演出陣がいなければ成立しなかったフィルム世界だったわけですね。

■で、撮り終えて東京に戻って来ると、円谷プロは次の作品がうまく決まらなくて、事実上、スタッフは解雇の形になるわけですね。撮影の稲垣さんも中堀さんも美術の池谷さんも大沢さんたちも、全員、作品がないもんですから、また次の機会にということで、バラバラになりかけるんです。でも翌年、実相寺昭雄がＴＢＳをやめたときに、「バラバラでいては力が出せない。みんなでグループを作ろう」と実相寺さんが呼びかけて、生まれたのが、《コダイ》です。今も続行している、実相寺さんを大将に担いでいる映画製作グループですね。まだ当時は仕事がなかったんですけど、何とかみんなでやろうというので会社を作った。《コダイ・グループ》というのは、撮影、照明、美術、録音の技術グループ、《コダイ》は実相寺さんを中心にした演出グループです。そういうことで、実相寺さんたちはグループを作って佐々木さんなんかを頼りにしていくわけです。

■一方、佐々木守さんの方はですね、手応えを得て、ドラマも突破できて、次の作品に入りたいと考えているときに、思わぬところで仕事が舞い込むわけです。

■「怪奇大作戦」の後、「妖術武芸帳」という東映製作の作品が放送されます。ＴＢＳの橋本洋二さんがプロデュースして、「隠密剣士」の伊上勝〔いがみまさる〕さんにシナリオを頼んで、東映側のプロデューサーは平山亨さんという布陣で、妖術を使う新しいタイプの剣士物を作るわけです。

■でも、視聴率が伸びない。視聴率的には、全然ダメなんですね。13話で打ち切りということになる。ところが東映とは26話の契約ですから、枠があいちゃうわけです。すぐ作らなければならない。すぐ作るんなら、佐々木守だと(笑い)。

■で、橋本さんは、「ちょっと来てくれないかなあ」と、ＴＢＳに佐々木さんを呼び出すわけです。「なんだろう」、嫌な予感がする(笑い)と思いながら佐々木さんがやってくると、橋本さんから「これを読め」と本を手渡される。『柔道一直線』という漫画の単行本で、横を見ると『柔道入門』というような子ども向けの入門書が２冊置いてある。「とりあえずこれを読め」と、橋本さんは佐々木さんに言います。「はあ」、「どうだね」、「はあ、何なんでしょうか」、「実はこうこう、こういう事情で『妖術武芸帳』が終わって、次回作を始めないといけない。台本がすぐ必要なんだ。明日の朝までに２話分を書けるかね。ホテルは取ってある。佐々木、頼むぞ」、「ええ！」みたいな(笑い)。

■実は、佐々木さんは、運動能力ゼロみたいな方なんですね。なぜか、それで「男どアホウ甲子園」という野球漫画の原作を書いてしまうあたりが佐々木さんなわけですが。本当に歩くのも大嫌いで、いつもタクシーに乗って、それなのに、のちにバイクが好きになって、それで事故ったりもするんですけど。とにかくスポーツと縁遠い人なわけです。

■で、とりあえず橋本さんの顔をつぶしてはいかんということで、佐々木さんはホテルにこもって、『柔道入門』を読んで、「柔道一直線」をなんとか２話書き上げるんですね。でかした佐々木、これだったらいけるぞ、といって撮影が始まるんですね。ところが撮影が始まるとですね、もしかしたら13本でいいやというのがあったせいなのか、佐々木さんの本もともかくスピード感をあげて、書ききるという形になっていて、演出も妙にいいんですね。みるみる視聴率が立ち上がってきて、これは13話でやめるのはもったいないよね、あと13話、みたいな形になって、どんどん続いて、結局１年半ぐらい「柔道一直線」は80話以上続くことになるわけですね。

■で、そのときに、当然佐々木守一人では無理だろうということで、複数のライターを投入することになる。橋本さんは若いシナリオ・ライターを育てるのが大好きなもんですから、ここで、同じく円谷プロを辞めさせられたというか、円谷プロを離れて沖縄に帰ろうかと思っていた上原正三をチームに投入するわけですね。「上原正三、佐々木守と一緒に『柔道一直線』書けよ」と。上原さんは金城哲夫のピンチヒッターで、「ウルトラマン」も「ウルトラセブン」も「怪奇大作戦」も書いていますから、よし、じゃあ、やろうということで台本を書くわけです。とりあえず原作の漫画を読み、佐々木さんが書いた脚本を読み、主人公・一条直也ほか、色々な脇のキャラクターがいますよね、それで上原さんは脚本を書いてみた。

■で、書いていってシナリオが出来上がって、関係者に読ませる。監督の奥中惇夫〔おくなかあつお〕さん、この方は柔道の名人で、柔道モノがうまい方で「仮面ライダー」なんかもやっている人ですけど、奥中さんは「まあ、いいんじゃない」と。東映の平山プロデューサーも、まあまあこんなもんですかね、みたいな反応だった。

■そこに佐々木守さんがやってくるわけですね。そして「どう？　ちょっと見せて」と。でシナリオを読み進める内に、突然、「このキャラクター、作品上のテーマの成り立ちが違うよ、上原君。こういうセリフは言わないと思うよ」みたいな指摘をするわけです。

■実は、佐々木さんという人は、作品に取り組むときに、大学ノートに「創作ノート」を作るんですね。そして、キャラクターの人物像を作るわけです。このキャラクターは、どういう性格なのか、ある出来事に対してどんな行動を示すのか。例えばライバルに会った時、けんかを売り込むのか、素直になるのか。あるいはライバルに勝った時、天狗になる男なのか、自慢しない奴なのか。あるいはライバルに負けたとき、ヒロインに慰められると、かえって怒る奴なんだ、というようなことを、どんどん造形してキャラを生きた人間にしていくわけですね。

■そして、主人公と戦う結城真吾という人物は、どういうキャラクターなのか、と。それは、ピアノを弾いているエリートな男だ、そうすると投げられたときに足でピアノを弾く、みたいな、近藤正臣さんが演じた結城のキャラクター造形が出来上がってゆくわけですね。それはノートの中に既にキャラクターが書かれている。それはなぜそうなのか。こういう男だから、こういう育ち方をしているからという人物設計が作られている。

■上原さんが書いてくると、違うと。こういうセリフを吐くんならば、このシーンでこういうセリフがなければおかしいじゃないか、そういう調子で、ガンガン上原さんを追い詰めていくわけですね。それで、上原さんは「柔道一直線」で、ライターとしてＴＶシリーズでの組み立てや人物の作り方、育て方を佐々木さんとの仕事で学ぶわけです。

■その頃、「柔道一直線」と同時に、「男どアホウ甲子園」という、『少年サンデー』の人気マンガの原作を佐々木守さんは手がけます。当時は、『少年マガジン』には梶原一騎原作・川崎のぼる作画の「巨人の星」があったんですけど、『少年サンデー』がそれに対抗するために、水島新司さんを抑えたんだけども、ちょっとストーリーが物足りないというか、だいじょうぶか、と。それで、テコ入れに編集部が佐々木守さんにお願いした。

■ところがなんたって、登場するのは、片腕のバッターですよ。さらには、美少女とあだ名のついた女性の高校野球の選手が出てくる。学生運動の活動家の選手も出てきます。

■佐々木さんは野球のことを何にも知りませんから。例えば試合が始まりますよね。試合の部分は水島さんに任せる。こういう魔球を投げるというような設定は、佐々木さんが作るんですけど、細かいところは水島さんお願いします、みたいな形ですね。とにかく、野球の作品を書こうとしたら、野球というのはピッチャーとキャッチャーとバッターがいれば書けると思ったと、佐々木さんは言うんですね。

■上原正三さんが佐々木さんから言われたのは、普通のライターというのは物語を作るときに１、２、３と考える、それから物語を始める。しかし、俺はそれをすべて一度捨てる、と。(次号に続く／採録・文責＝小西昌幸)